

ハイデー

(第二十二回)

津田芳雄譯

あくる日、おひるがすむさぐ、ハイデーはおばあさんの家へ行つた。もう雪がないから、ひきりで行けた。さわやかな五月の風に吹き送られて、足はひきりでに進み、晴れた山道を飛ぶやうに駆け降りるのは、とても氣持がよかつた。

おばあさんはもう起き上つて、いつもの隅つこで紡ぎ仕事をしてゐるが、なんさなく心配さうな顔をしてゐた。昨夜ペーテルが、ぶりぶりしながら、フランクフルトから大勢お客さまがやつて来る話をして、もしそんなこゝになれば、その後又そんなこゝが起るか知れたものでないさ云つたので、おばあさんはハイデーが又連れて行かれるのではないか、心配で夜さほし眠れなかつたので

ある。ハイデーは駆け込んで来るさ、早速小さな腰掛けをおばあさんのそばへ持つて来て、夢中でお客さまのお話をしはじめた。けれどもしばらくするさ急にぼつんさ止め、心配さうに訊ねた。

「さうしたの、おばあさん、こんなお話聞いても、おばあさんはちつともうれしくないの？」

「うれしいさも、うれしいさも。お前さんがそんなに喜んでゐるのさもの」

おばあさんは無理にうれしさうな顔をして答へた。

「それでも、なんだかおばあさんは、まだ心配さうだわ。ロッチンマイアさんは、あんなに云つても、やつぱりやつて来さうだからなの？」

ハイディは自分も心配になつて来て、たづねた。
「なんの、なんの、何でもないんだよ。わたしには
はぎんなに辛くつても、お前さんのためにはこの
上もなく結構なごきなんだからね。さあ、せめて
お前さんが今こゝにゐてくれることが、しつかり
わかるやうに、お手々を握らせておくれ」

「おばあさんに辛いごきだつたら、わたしにぎん
な結構なごきだつて、わたし、しないからいい」

ハイディがきつぱりごきさういへば、おばあさん
はなほさら、ハイディがもう快くなつたのでいよ
いよフランクフルトから連れもごしに來るのだこ
いふ確信を深め、ますます心を痛めるのだつた。
けれども、自分があんまり悲しめば、ハイディは
思ひやりの深い子であるから、行かないなごき云
ひ出しては濟まないと思ひ、一生懸命に悲しみを
かくさうごした。それにはたつた一つの救ひがあ
るのだつた。

「ハイディや、わたしに『ものみなはよき實を結
ぶ』『さいふあの讚美歌を讀んでおくれ』」

ハイディは元氣な澄み切つた聲で讀んだ。

ものみなはよき實を結ぶ

ただ頼れ、任せよ我に

私は來ぬ、奇しき癒やしの力もて
十重二十重汝をしばれる
縛を解かむとて
「あゝ、これだ、これだ、ぎんなにこれが聞きた
かつたか」

おばあさんの顔からは、深い悲しみのかげが消
えて行つた。ハイディは考へ込みながらちつこお
ばあさんの顔を見てゐたが、

「癒やしの力」つていふのは、おばあさん、痛い
ごころや苦しいごころをなほして、又元氣にして
あげる力のごきなのねえ」

ごき云つた。おばあさんはさうださうなづき、覺
えておきたいから、もう一度讀んでくれごたのむ
ご、ハイディも、なんでもものごきはきつごおし
まひにはよくなるのだよご受け合つて下さる神様
のごきばがうれしくて、心をこめて、何度もくり
かへしくりかへし讀んであげた。

夕方になつたので、ハイディは山をのぼつて歸
つて行つた。頭の上には後から後から三星が數を
増し、その一つ一つがハイディの胸に、次ぎ次ぎ
に美しい歡びの光りを射し送つてくれているやう
に見えるのだつた。ハイディは見惚れて何度も立

ち止まつてしまつた。一つ殞え、二つ殞え、たうさう空一面に星が輝きわたつた時、ハイディは聲に出して云つた。

「さうよ、わたしたちがさうしてこんなふうれしくつて、なんにも心配しないのか、今わかつたわ、神様がちやんさわたしたちによいこみや美しいこみを、知つてゐて下さるからなんだわ」

家に歸つてみるに、おぢいさんもやつぱり空を見上げて、星を眺めてゐた。まつたく、こんな美しい星空は、近年にないこみだつた。

かうしてこの年の五月は、毎晩美しい星空がつゞいたが、晝間もそれに劣らぬ氣持のよいお天氣つゞきだつた。おぢいさんは毎朝早く外を眺めては、驚いて叫ぶのだつた。

「こしは全く、めづらしい天氣つゞきぢや。草木がぐんぐん伸びるぞ。さうぢや、大將、よく氣を付けぬこ、お前の兵隊ごもは、食ひすぎをするぞ」

ペーテルは「よし來た」さいふ風に、鞭を振つて見せた。

木々の緑はいよいよ深まり、五月も過ぎて六月になつた。日は長くなり、暑さも増して來て、お

山は花ざかりで、さこもかもそのいゝ香で一ぱいだつた。かうしてこの月も終りかけたある日、ハイディは家の仕事をすませ、樅の木や、その少し上の方にある半日草の蕾がもう開いたかを見に行かうと思つて、駆け出した。ところが、家の角を曲つたかと思ふに、急にびつくりするやうな大聲をあげたので、おぢいさんは何事か、慌てゝ物置きから飛び出して來た。

「おぢいさん、おぢいさん！」

ハイディは氣狂ひのやうに叫んでゐた。

「早く來てごらんさい、ほら、あそこ、あそこ！」

おぢいさんは傍に並んで、ハイディの指す方をながめた。

奇妙な行列が山をのぼつて來た。先頭には二人の男が山轎かをかついで來、中に深々ミシヨールにぐるまつた少女が乗つてゐた。その次ぎには、立派な女のひしが馬に乗つて、あたりの景色をたのしさに眺めながら、そばに歩いて來る案内人に話しかけてゐた。そのうしろからは、一人の男が車のついた寢椅子を押して來た。病人はいつもはこれにかけてゐるのだが、険しい山道だけ、危い

「思つて山轎にしたのだらう。殿には、人夫が山のやうに外套や肩掛や毛皮を背負つて来た。」

「いらしつたわ、いらしつたわ!」

ハイディはよろこんで跳びまはつた。これこそ、フランクフルトからのお客さまだつたのである。行列はだんだん近づき、たうミう着いた。山轎かきが山轎をおろすミ、ハイディは飛んで行つた。二人の子供たちはうれしさに抱き合つた。おばあさまも馬から降りて、やさしくハイディの頭を撫でた。それから、お迎へに出て来たおぢいさんミ挨拶をしたが、お互ひにハイディから噂を聞かされてゐるので、まるで古くからの馴染みのやうで、少しも初対面のぎごちなさはなかつた。

御挨拶がすむミ、おばあさまは早速景色をほめはじめた。

「なんて立派な御すまひでせう。この景色を取り入れたところなミ、王様だつて羨みますね。ほんたうに、これほごよい景色ミは、思ひも付きませんでした。それに、ハイディちゃん顔いろのいゝこと。——まるで野バラのやうぢやありませんか」

かう云つてハイディを引き寄せ、その生き生きした赤い頬つべたを撫で、やつた。

「まつたく、ごこから先きに眺めようかミ迷つてしまひますね。なんていゝ景色なんでせうねえ。」

クララや、あなたはさう思ひますね」

クララはうつかり景色に見入つてゐた。こんな美しいながめがあらうミは、夢にも思つたことミもなければ、まして見たことなミ、あらう筈もないのだつた。ほごぼしり出るやうな歡びの聲をあげた。

「おばあさま、あたし、さうつミいつまでも、こゝにゐたいわ」

おぢいさんはその間に寢椅子を引つ張つて来て、その上に肩掛けを二三枚しき、クララのそばへ行つた。

「お嬢さんは、馴れた椅子の方が工合がいゝでせう、山轎は硬うござんせう」

さう云つて、軽々ミその丈夫な腕に子供を抱き上げるミ、そつミ寢椅子にねかせ、大事に毛布をかけてやつたり、足が柔い座蒲團の上に来るやうに氣を配つてやつたりして、まるで、これまでずつミ専門に、足のわるい人ばかり手がけて来た人

のやうだつた。おばあさまはびつくりして見てゐたが、

「一體どこでそんな看護學を修めていらしたのでございませうか。教へていたゞいて、わたしの知つてゐる看護婦たちをみんなそこへ出して、病人の扱ひ方は見習はせたいくらいですよ、さうしてそんなに御精しいのですか」

と訊いた。おぢいさんは微笑ほほえみんで、

「わたしのは、習つたさいふより、實地に覺えたのですな」

だが、さういふうちに微笑は消えて、見る見る悲しさうなかげが顔ぢうにひろがつた。目の前には、ゐざりになつて寢椅子に寢たきりで、手足も動かせない、苦しさうな顔をしたつづき昔の中隊長の顔が、まざまざと浮んで來た。それはおぢいさんの若い時ゐた中隊長の隊長でシリイの激戦で負傷して倒れてゐるころをおぢいさんが見付けて、野戦病院にかつき込んだのであるが、それ以來、中隊長はほかの者は誰一人寄せ付けないで、息を引き取るまで、つづきおぢいさんの手厚い看護を受けつゞけた。だから今、おぢいさんが足の立たないクララに、こんなにも馴れ切つた手付き

で、細々世話をやいてやるのも、いかにも自然のこころなのであつた。

空は一點の雲もなく晴れわたり、小屋も樅の木も岩も峯も、鮮やかに照らし出されてゐた。クララには、あんまり美しい景色がそこにもここにもいつばいあつて、とても見切れない氣がした。

「ねえ、ハイデイ、あたしもあんたと一緒にどこでも歩きまはれるんださ、いゝわねえ。ちよつこでも歩いて、樅の木だの、そのほかいろんなものが見られたら、さんにいゝでせう。あたし、あんたにお話しゝてもらつて、來ない前からこゝのものは何でもよく知つてゐるのですもの」

ハイデイは早速、ありつたけの力でクララの寢椅子を押して、樅の木の所へ連れて行つた。クララは今までこんなに高い眞直ぐな幹をした、こんな上にごゞきさうな長い繁つた枝をした木を、一べんも見たことがなかつた。おばあさまでさへ、子供達について來て、びつくりしてしまつたからである。その青々空さまに伸びた高い梢か、大昔から今まで、何ものにもわづらはされずに、少しも變らず黙々として、下の谷や人の往來を眺めて來た大きな眞直ぐな枝をつけた柱のやうな幹

か、それからほめようか迷ふのだつた。

ハイディは今度はクララの寢椅子を山羊小舎の前へ押して行き、小舎の戸をすつかり開けて、中を見せてやつたが、今は山羊達がペーテルミ山へ行つてゐる留守なので、つまらなかつた。クララは山羊たちが歸らないうちに山を下りなければならぬと悲しがつて、しきりにおばあさまに訴へた。

「ペーテルが山羊をみんな連れて来るころが見たいのよう、おばあさま」

「見られるものだけを、よく味はつて見ませうね、そして見られないものゝこころは、考へないことにしませうよ」

おばあさまはハイディの押す椅子のあさからついて行きながら答へた。

「あら、お花！」

クララが叫んだ。

「眞赤なお花が、あんなに澤山！まあ、風鈴草がこつくりしてるわ。あたし、出て行つて摘みたいわ！」

ハイディはすぐに走つて行つて、大きな花束を作つて来て、クララの膝の上にのせてやつた。

「でも、こんなの、何でもなくつてよ。山羊が草を食べに行く山まで行つてごらんさい、それはさつてもすてきよ！赤い矢車菊だの、青い風鈴草だの、金のやうに光る半日草だの、一三所に重なり合つて咲いてるのよ。それから、おぢいさんが『光る眼』と呼んでゐる大きな葉っぱのやら、さてもいゝ香ひのする小つちやな花の咲く茶色のやら、いろんなのがあるのよ。あんまりきれいだから、一べん坐り込んだら、動けないくらゐよ。なにもかまが、さても可愛らしくつて、いゝにほひなんですよ！」

ハイディはまざまざその景色を思ひ出し、自分の言葉につりこまれて、今すぐにも行つて見たくなつた。そのキラキラ光る眼を見てゐるミ、クララにもすぐその思ひが傳はつて、やさしい碧い眼に同じ心をこめて見返すのだつた。

「おばあさま、あたしにもそこへ行けて？ハイディちゃん、あたしも歩いてあなたと一緒にここへでも登れるのだつたら、ごんなにいゝでせうねえ」
「わたし、きつミあなたを押して行けてよ。この椅子はさても樂に動くんですよ」

ハイディはその證據を見せようミ、大變な勢で

押したので、角を曲るべき、も少しで轉がり落ちさうになつた。幸ひおばあさまがすぐそばにゐて、危く止めて下さつた。

その間、おぢいさんはせつせき働いて、テーブルを持ち出して、そのまはりに新しい椅子をまくばり、みんなが外で御飯がいたゞけるやうにした。内では御飯の支度がもう出来て居り、お乳もチーズもすぐに出來た。みんなは大元氣でおひるの食卓についた。

おばあさまは、お醫者様もせんに來た時悦んだと同じやうに、この谷も山も青空も一目に見渡せる食堂のながめに、うつさりにした。氣持のよいそよ風が吹いて來て、樅の木は枝を鳴らして、楽しい伴奏を添へてくれた。

「こんな氣持のいい思ひをしたのは初めてござんすよ。ほんたうに結構ですこねえ」

おばあさまは二度も三度もかう云つて感謝し、それから急に驚いて叫んだ。

「まあ、クララ、あなたはチーズのお代りをしてるぢやありませんか」

なるほご、クララのお皿には、こんがりこ狐いろに焼けた二きれ目のチーズが載つてゐる。

「え、おばあさま、ごてもおいしいの。ラガツ温泉の御馳走みんなよりも、まだおいしいのよ」
クララはなほもおいしさうに食べつゞけながら答へた。

「それは結構。召し上られるだけ召し上つて下さいよ。料理はまづくとも、山の空氣が味付けをしてくれますからなあ」

かうして食事は進んで行つた。おばあさまはおぢいさんご大層話が合ひ、次ぎから次ぎへ三話のはづむにつれ、人間や世の中についての意見が、まるで昔からの親友のやうにぴつたりご一致するのだつた。時は楽しく過ぎて、やがておばあさまは西の空を見上げながら云つた。

「さあ、そろそろおいこましなければなりませんね。お日様があんなに傾いて來ました。もうぢき馬や山轎が迎ひに來るでせう」

クララはうなだれて、一心に頼むのだつた。
「もう一時間か二時間だけ、ねえおばあさま。だつてまだおうちも、ハイデイのお床も、なんにも見せてもらつてないのですもの。あ、日が暮れるまで、十時間もあるさうわねえ」

「まあ、あんな無理ばつかり云つて」

おばあさまも、さうは云ふものゝ、中が見たさうだつたので、みんな食卓から立ち上る。おぢいさんはクララの寢椅子を小屋の入口まで押し行つた。椅子の幅が廣くて、入口の戸につゝかへて困つたが、おぢいさんはぢきにクララをがつしりこした腕に抱き上げて、樂々ミ中へ連れて入つた。

おばあさまは家ぢうを一こわたり見てあるき、なにもかもが小ぢんまりミ片付いてゐるのが非常に氣に入つた。

「あゝ、これがハイディちゃんのお寢間ですね」
さう云ひながら、怖がる風もなく、さんざん梯子を上つて枯草の積んである屋根部屋へ行つた。

「まあ、いゝにほひだこ。ほんたうにくすりですわね、こんなミこころで眠るのは」

それから、丸窓のミこころへ行つて外を見渡したり、ハイディのすばらしい枯草のベッドを仔細に眺めたりしながら、考へ深さうに枯草のほひのする空気を心ゆくまで吸ひ込んでゐた。クララもおぢいさんに抱かれて上つて来るし、ハイディも悦んで跳びはねながらついて来た。クララはもう夢中だつた。

「氣持がいゝわねえ。ハイディちゃん！空がま上に見えるのねえ。それに、いゝにほひがするし、椋の木の鳴る音まで聞えるわねえ。あたし、こんな氣持のいゝお寢間、はじめたわ」

おぢいさんはおばあさまを見やつて云つた。

「實はさきほごから考へて居りますのぢやが、もし御異存さへなければ、お嬢さんを私共へおあづけ下すつては如何でせう。必ずめきめきミ丈夫になられますぞ。幸ひ肩掛や毛布なき、きつさり御持參ぢやが、あれで立派な柔い寢床を拵へます。御世話は萬事わたしがお引き受けしますから、御心配はいりませんわい」

クララミハイディはこれを聞くミ、まるで籠から放たれた二羽の小鳥のやうに喜んだ。おばあさまの顔も、満足さうに輝いた。

「まあ、御親切にありがたうございます。わたしも、こゝにしばらく御預り願ふこころ、クララに一等必要なこころではないかしら、丁度今考へてゐたのですけれど、御迷惑ではないか、實は御遠慮申してゐたのでございますよ。今あなたに、子供の世話なぞまるで何でもないこころのやうに仰しやつていたゞいて、こんなうれしいこころは、さ

いません。心から御禮を申し上げます」

おぢいさんは、早速まめまめしく支度をはじめた。まづクララを外の寢椅子にねかせておいて、山ほさもある肩掛や毛布を持つて来た。ハイディはクララについて行つたが、うれしくつてびよんびよん跳びまはり、いくら高く跳び上つても、このうれしさを表はすにはまだ足りない気がした。

おぢいさんは笑ひながら云つた。

「はじめ持つておいでになつた時は、これぢやまるで冬籠りの支度ぢやと思ひましたが、なるほど役に立ちましたなあ」

「まさに先見の明でございませう！」

おばあさまも、愉たのしさに答へた。

「幸ひなにごともなく山路を登つて参れましたからようございしましたやうなものゝ、もし嵐にでも逢つた時のことを思つて、用心をして参りましたのが、今役に立つたのでございますね」

二人は屋根部屋へ上り、寢床をこしらへにかゝつた。幾枚も幾枚もの肩掛や毛皮を積み重ねて、出来上つたところは、まるで小さな要塞のやうだつた。おばあさまは、一本でも藁が突き刺さるや

うなごこはないか、注意深く手で探つて見たが、

おふさんは柔かでないからか、ふかふかしてゐて、少しも突き刺さるものなごなかつた。満足して二人が降りて見るに、子供達はキャッキョッキョウ笑ひながら、クララがこゝにゐる間、毎日朝から晩まで何をして遊ばうかさいふ相談をしてゐた。

するにクララがいつまでこゝにゐられるかさいふこゝが問題になり、子供達がおばあさまに訊ねるに、おぢいさんに訊いてごらんさいと云はれ、

おぢいさんからは、まづ一ヶ月は試しに山の空気に馴染んでみなければ、さいふお返事をもらつた。子供達はそんなに長く一緒にゐられようとは思ひもかけなかつたので、手を叩いて大よろこびだつた。

山かこ轎かき馬かこ案内人が迎ひに来たが、山轎はすぐかへして、おばあさまは山を降りる支度をはじめた。

『さよなら』ぢやないわねえ、おばあさま。時々あたたかさがさうしてるか、見に来て下さるでせう。たのしみにして待つてますわ、ねえハイディちゃん？』

ハイディは今日はあんまりうれしいこゝづくめ

なので、もうお返事も出来なくて、たゞ跳び上つて見せた。

おばあさまが遅しい馬に跨るゝ、おぢいさんは手綱を取つて峻しい山路を下つて行つた。おばあさまの辭退するのを押しこめ、坂道が急で危いから、デルフリまで送つて行く云つてきかなかつた。

片田舎のさびしい村であるデルフリに、一人ぼつねんごゝあるのも退屈なので、おばあさまはラガツ温泉へ引き揚げ、そこから時々山へ訪ねて来ることに決めた。

おぢいさんが歸つて来るより先きに、ペーテルが山羊をつれて降りて來た。ハイディの姿を見るゝ、山羊たちは轉がるやうに飛んで來て、またゝくうちにハイディの寢椅子にねたクララのまはりを取りまいてしまひ、我勝ちに頸をすり寄せて來た。ハイディはそれをいちいちクララに引き合はせ、名前を教へてやつた。ぢきにクララは、まへから逢ひたがつてゐた小さな「ゆき」や「元氣な」「ひわ」や、お行儀のよいおぢいさんの二匹や、あの「トルコ人」はもちろんのこゝ、そのほか大勢の山羊たちにお友達になつた。ペーテルはその間、わきの

方からじろじろながめてゐるが、時々クララをうらめしさうに睨み付けた。二人が大きな聲で、

「さようなら、ペーテル」

と叫んでも、ペーテルは返事もせず、空氣を眞二つに裂くまじき勢でぷりぷりな鞭を振りまはし、それから、あゝをも見えずに山羊たちを従へて駆け降りてしまつた。

さていよいよ、クララがその日いちんち山で見たものゝ中でも一等美しいものが、日も暮れ方になつて、やつて來た。クララは枯草の屋根部屋で、大きなふかふかした寢臺にねて、丸窓から輝く澤山の星を眺めてゐるが、急にうれしさうに、そばに立つてゐるハイディに呼びかけた。

「ねえハイディ、あたしたち、まるで高い馬車に乗つて、まつすぐに天へ走つて行つてゐるみたいね」「ほんたうね。あんた、お星様がさうしてあんなにうれしさうにわたしたちを見下ろしながら、こつくりしてるか、知つてゝ？」

「知らないわ。さうしてなの？」

「それはね、お星様はみんな天國にゐるでせう？だから、神様がなにもかもよくして下さつて、わたしたちは何にも心配しなくてもいゝ、おしまひに

はみんな神様がよくして下さるんだ、つてこゝをちやんぞ知つてるからなのよ。だからあんなに、いつもうれしうななのよ。こつくりして見せるのは、わたしたちにもうれしくなつてほしいからなのよ。だけぎ、わたしたちは神様が覚えてる下さるやうに、しよつちうお祈りしなきゃならないのよ。お祈りをすれば、わたしたちも、先きのこゝを何にも心配しないで、いつも大丈夫な氣持でゐられるのよ」

二人の子供達はお床の上に坐つてお祈りをした。それがすむと、ハイデイはその丸々した小さな腕に頭をのせて、すぐにすやすや眠りはじめたが、クララはこんな高いところでお星様と一緒に眠るのは始めてなので、めづらしさでうれしさで、なかなか眠れなかつた。今までは、お星様なごめつたに見たこゝもなかつた。夜、外へ出掛けるとこゝは決してなかつたし、家では日の暮れないうちから、カーテンが深々垂れこめてゐるたからである。目を閉ぢると、もう一べんだけ、あのさりわけよく光る二つの大きなお星様が、まだ自分を見下ろしながらハイデイの云つたやうにこつくりしてゐてくれるかを確かめて見なくてはならな

いやな氣がして、又しても目を開けるのだつた。するゝ必ずその二つは、いつも同じ所で光つてゐた。クララはその美しいキラキラ光つてゐる二つの顔を、いつまで見つめてゐてもまだたんのうし切れない氣持だつたが、そのうちにクララの眼はひざりでにふさがり、やがてその二つの大きなつかしいお星様が、まだぢつと見守つてゐてくれる夢路をたぎつてゐた。

敏降り鹿島の神を祈りつゝ、

皇御軍に我は來にしが。

天地の神を祈りて幸矢抜き

筑紫の島を指して行く我は。

—萬葉集より—